

## 当院における尿中レジオネラ抗原検査実施状況と陽性症例の後方視的解析

◎野村 杏奈<sup>1)</sup>、鈴木 美穂<sup>1)</sup>、杉浦 康行<sup>1)</sup>、深津 裕雅<sup>1)</sup>、中西 幸音<sup>1)</sup>、平林 留名<sup>1)</sup>、成瀬 瑠美<sup>1)</sup>、舟橋 恵二<sup>1)</sup>  
安城更生病院<sup>1)</sup>

【はじめに】尿中レジオネラ抗原検査は、レジオネラ症の診断法において有用な検査法である。しかし稀に偽陽性を呈することがあり、結果の解釈には注意が必要である。今回、当院における約10年間の尿中レジオネラ抗原検査の実施状況と、陽性反応を呈した検体への追加試験および該当症例を后方視的に解析したので報告する。

【対象及び方法】当院で2014年4月から2024年3月までに尿中レジオネラ抗原検査を実施した8,398件を対象とした。2014年4月から2015年7月まではBinaxNOWレジオネラ（アボットジャパン）（Ⅰ期）、2015年8月から2021年12月まではイムノキャッチーレジオネラ（栄研化学）（Ⅱ期）、2022年1月以降はリボテストレジオネラ（極東製薬）（Ⅲ期）を用いた。また、2023年に陽性となった5例（症例①～⑤）に対して、追加試験として極東製薬にて異好性抗体阻止剤添加の確認、抗LPS抗体・抗L7/L12抗体における吸収試験を実施した。

【結果】1年あたりの検査件数の平均はⅠ期で758件、Ⅱ期で718件、Ⅲ期で1,235件であった。陽性率はⅠ期で

0.20%（2/1,010例）、Ⅱ期で0.50%（23/4,610例）、Ⅲ期で0.47%（13/2,778例）であり、Ⅱ期以降で陽性率は増加した。また、陽性検体への追加試験の結果、症例①で抗LPS抗体吸着による陰性化を認め、症例②で抗LPS抗体と抗L7/L12抗体吸着による陰性化が認められた。症例③④⑤では各抗体の吸着試験による陰性化は認められず、非特異反応による偽陽性の可能性が示唆された。なお、症例①②はレジオネラ症と診断され、症例③④⑤は診断されなかったため臨床所見とも合致する結果となった。

【考察】2023年は他の年と比較し検査依頼数が多く、検査前確率が低かったため、偽陽性を呈する検体が散見されたと考えられる。また、偽陽性が疑われた検体は、尿検体の濁りによる金コロイド凝集等が結果に影響を及ぼしたと推測された。尿中レジオネラ抗原検査は有用な検査であるが、臨床所見と併せた総合的な結果解釈が必要である。

【謝辞】本発表にあたり、調査資料を提供いただいた極東製薬工業株式会社の皆様に深謝いたします。

連絡先：0566-75-2111（内線2451）